



「デイ」

中央公論社

D

【
デ
ィ
ー
】

D
211

©一九八五年
検印廃止

定価一三〇〇円

昭和六十年六月十日初版印刷
昭和六十年六月二十日初版発行

著者 小田 実

発行者 嶋中 鵬二

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八一七

振替 東京二―三四

ISBN4-12-001399-5

D

২৭
১
১

装帧
田淵裕
一

その軍艦T……が着いたときには、S……の街にはたいして出むかえが出たわけではなかった。いや、それはまるっきりなかったと言ったほうがことの事態にそくしている。

同じアメリカ合衆国海軍の軍艦でも、着いたのが世界最大級を誇る歴戦の戦艦N・J……や世界最大でもあれば最新でもある航空母艦C・V……だったなら、話はもちろんかなりちがっていたにちがいない。N・J……はかつてはその長大な射程距離と巨大な破壊力を持つ艦砲の威力にもの言わせて、海上はるかからアカがチョウリョウする陸地の殺戮と焼却に精を出したことのあつて、そして今は年老いたとは言え低空海上地上すれすれのところを飛んで獲物に破壊の一瞬まで食い下る新型核弾頭つきミサイルをあらたに備えての再度の御奉公、またはや殺戮と焼却の大航海に乗り出して行こうとする大軍艦だったし、C・V……と来るとこちらは文句なしの世界最大、最新の原子力推進の航空母艦、機動力、航続力、破壊力、殺戮力すべてにわたって抜群で太平洋、

インド洋、大西洋と世界狭しとばかりに縦横に動くトン数八万トン余の巨艦だったから、こういうのが世界のはてのどこからかやって来るとなると、新聞も書き立てれば、テレビもものものしくカメラの砲列を敷いてたとえほんのいつときのことに終るとは言えそれ相應ににぎやかに騒ぎ立てたことだろう。そして、そこまで新聞、テレビが騒げば、ひとところくらべればるかに小さくもなれば熱量もめっきり減ったとは言え政党、党派、学生、市民もろろの反対運動がいっとき息を吹き返したように騒ぎ出して、S……の街なかでもいつもながらの「入港阻止」の集会が開かれたり、デモ行進が警官隊と小ぜりあいを演じて二、三人がとっつかまる。

もちろん一方にこういう出むかえがあれば、他方にいかめしく濃紺、カーキ色の戦闘服に身を固めた青年たちが乗り込む車の一団の怒号と軍艦マーチの出むかえがあるのは今日ではもう世の中に男がいれば女がいるほど当然なことで、おかげで街はどちらも日本国民の名の下に叫ばれる「入港阻止」「入港歓迎」のおたけびと騒音のなかでいつとき騒然となるが、もちろん、N・J……やC・V……を出むかえるのはこうした人たちのおたけびや騒音だけではなかった。なにしろN・J……やC・V……というような世界最大級の軍艦が着けば自由に飢え飲み食いに飢え女に飢えた万単位の男が上陸して来ることになるのだ、このごろでは彼らの祖国は世界最高の金持国としての威信もとみに低下して今は彼ら相手の専用バーだったはずなのが軒なみに日本人むけのものに変わってしまったもいれば、彼らのほうでもハンバーガーの立ち食いスタンドでビールを

飲むというようなみみちいことをやってのけたりするのだが、それでもこのいつとき、万という単位の食欲、飲み欲、性欲の勇者たちをまえにして街の商店街のおっさん、かつての外人専用バーのママさん、街角に立つ女性、それぞれがそれぞれの出むかえに自らの幸運の行くえを賭けてふしぎはない。

しかし、T……の場合はちがった。

T……はN・J……、C・V……と同じレッキとしたアメリカ合衆国海軍の軍艦ながらただの随伴艦で、大きさもN・J……、C・V……の何万トンという大きさにくらべれば千の単位のトン数で見えがしないことおびただし。大砲もかなりな数のつけていたし、新型核弾頭ミサイルも昔の戦艦ぐらい何隻でも木っ葉みじんにするぐらい持っているとはトニイの話だったが、どうよそおいを凝らしてみたところで随伴艦は随伴艦で、それは、つまり、主人あってのお伴だということだ。お伴は主人があつてはじめて引き立つのであつて、そのときにように主人役のN・J……やC・V……がまたもや世界のあちこちでチョウリョウを始めた陸地のアカを威嚇する目的で大演習に出かけているあいだにそこにどのような思惑、魂胆が提督たちの頭のなかにひらめいてのことなのか、T……という随伴艦が一隻ひっそりとやって来たとなると、軍艦来航のニュースをとらえることわが政府当局者よりも新聞記者よりも誰よりも早い街の一群の女性たちと洗濯屋諸氏にも気づかれることなくことは進んで突然市民が気がつくと、肌色は白、黒、黄色とり

まぜての、服装もただのＴシャツ姿からそれなりにスーツの上下を着込んだのまできにいるといういでたちで、兵隊と言うよりフット・ボールの応援帰りと見える陽焼けした一群の男たちがぞろぞろ思い思いに街路を歩いて来るのに出くわすのである。

もっともそういう一群の男たちが突然立ち現われたとしてもべつに慌てる必要はなかった。彼らの数はたいした数ではないのだから、彼らの出現は市の財政にも街の商店街のおっさん、かつての外人専用バーのママさん、街角に立つ女性のふところぐあいにもさして寄与をなさないことは判っていた。新聞記者も新聞記者で、随伴艦の寄港のことなど記事に書いてみたところでボツになることは知っていたからそんな無駄な労力は使わなかったし、政党、党派、学生、市民もろもろの反対運動にしてもそういうつまらぬ軍艦の「入港阻止」を叫んでみたところでいったい何んになるのか。軍艦マーチの車の一団にしても思惑と事情は同じで、とどのつまり、Ｔ……はひっそりとやって来てひっそりと出て行ったことになる。もちろん、それでも上陸して来たフット・ボールの応援帰りの男たちによって駅前飲み屋の赤チョーチンが無料の「スーベニア」として盗まれ、彼らの出現と同時に横文字の看板をすばやく掲げたかつての外人専用バー「ローズ・ガーデン」で窓ガラスが男たちどうしの内輪もめのケンカによって叩き割られ、その騒ぎでパトカーが駆けつけるという一幕があり、女性たちがベッドの上でそれぞれにとめにはげみながらこいつらめ、昔のアメ公とちがってほんとにしみったれの文なしになりやがってといちように今さ

らのように憤慨したということはあっても、全体としてT……の来港、出港はひっそりとしてめだたぬものだった。

T……がそんなふうにいづくからともなく来ていづくへとも知らず立ち去って行ったあと、フット・ボールの応援帰りの男たちのなかで三人が街に残されていた。二人は女の家で酔っぱらったあぐく取り残されてしまったのだが、翌日蒼い顔をして司令部に出頭して来た。あとのひとりとは、女の家でいつづけしているのだろう、そのうち金がなくなつて明日にでも出て来ると係官はタカをくくっていたが、五日経つても一週間経つても、彼の予想を裏切つて姿を現わさなかった。これは脱走じゃないかね。係官ははじめひとり言として言い、そのうち同僚にも言い、上司にも報告した。そのときになって彼ははじめてトニイというそのひとりの男の名前を記憶におさめるとともに、トニイの年齢が五十歳近いことにあらためて気がついた。この老いぼれ、脱走するとは、いったいまた何んのためだ。野郎、女のためだろうそれとも公金を費い込んだのかと答は頭のなかに同時にひらめいていた。

そのとき、わたしはどうしていたかと言うと——そのとき、と言うのは係官が憐れな老脱走兵

トニイの命運を一瞬考えたときのことではなくて、T……がいずくからともなく来てS……の港外のミドリ的小山に取り囲まれた静かな入江のまんなかでエンジン停めてイカリを下ろした真夏の暑い日の早朝六時すぎのことだが、わたしはそのとき入江を見下す小山のひとつの頂き近くハヤシさんの家でトーストにインスタント・コーヒー、安物のマルダイ・ハムのハム・エッグというお手軽な朝飯をそのハヤシさんという名の五十がらみ、つまり、わたしと同年輩の禿頭の男とむかいあって食べていた。と言い出すと、わたしが何やらハヤシさんの家にそのまえの晩からでもやっかいになって泊めてもらったあげくにあつかましく朝飯までいただいているというふうに聞こえてしまうかも知れないのでことわっておきたいが、そのときわたしがハヤシさんの世話になったのはハヤシさんがこれから朝飯を食べるんですがごいっしょしませんかと誘ってくれて奥さんがお手軽に準備してくれたその朝飯ぐらいで、わたしはべつにハヤシさんの家に泊めてもらっていたのでもなければ、朝飯をよばれに駅前のビジネス・ホテルからタクシーを飛ばして小山の頂き近くまで上ったわけでもない。わたしはただ、わたしの商売の話をしに行っただけのことだ。

わたしがときどき取引の相手やこれから商売のパートナーになろうとする人物の家を突然予告なしに早朝訪問するのは、それが相手の信用調査の簡便で確実な方法だと長年の体験から信じているからだ、昼間会社の事務所ではなんとでもごまかせるものだし、さりとて夜に

料理屋、バー、キャバレーのたぐいに連れて行かれたりしても相手のたしかなところでの金力、能力、人となりはなかなかもって判るものではない。それよりときには興信所の力を借りてでも探し出した彼の住居のありどころに早朝駆けつけてみるのだ。誰だって人間、そんな朝早い時刻に客が来るとは思っていないだろう、もっとも無防備、まるはだかである上に、まだ起きぬけでぼんやりしているということもある、不意を衝かれて正体をさらけ出すことも間々^{時々}あって、それでときどきこれと思うときには突然早朝訪問をやつてのけるのだが、わたしがハヤシさんの家まで出かけたのもそのこれと思うときのひとつだった。

わたしの商売はバッテリーで、——と言いつても何んのことやら判らぬ無学な人が多いだろうから一言しておく、電気冷蔵庫、テレビ、野球のグローブ、痔の病人用の水の出る便器、電卓、ゴルフ・セット、ミニ・バイク、トイレット・ペーパー、電気釜、背広の三つぞろえ、ビデオ・テープ、カメラ、サルマタに花模様のパンティ、扇風機、マイコン、ラーメン、自転車……要するにおよそこの世で人のくらしに必要な物、必要だと思わされている物^{もの}いっさいがっさい、わたしらのことばで言うところとツケモノからヒコキまで新品中古、とりまぜてバカ安値で仕入れてバカ安値で叩き売る商売だが、それをバッテリーという名で呼ぶのは、叩き売るとき棒でバッテリーと卓子を叩いて景気をつけるからだというもっともらしい話を聞いたことがあるが、まあそんなことはどうでもよろしい、とにかくわたしはこのバッテリーをやつて来てこれでもう十年、その

パッタ屋をこのS……でもハヤシさんを取りあえずのパートナアとしてやり出そうとしての魂胆あつてのことだ、わざわざビジネス・ホテルからタクシーを飛ばして小山の頂き近くまで上つて行つたのは。――

ハヤシさんのことは、現地の事情にくわしいS……出身の同業者からまえて聞いて来ていた。同業者もそこでパッタ屋をやり出そうともくろんであれこれ調べていたものらしいが、それは要するに世界の風雲このところにわかに急になっていつとき忘れ去られたような存在になつていたS……がその軍港としての地の利のゆえにふたたび脚光をあび始めて来ていたからだ。とにかく、あそこはあんた、チョーセンに近いよ。同業者は、あいつ、ほんまはチョーセンやでところそりわたしの耳に耳打ちするときとはちがつた口調で言つた。同じことばでも言い方によつてずいぶん變つた感じになるものだ。とわたしは少し感心したが、とにかく同業者はそういうもの知り顔に言つて、あんた、そやからこれからゾクゾクでっかい軍艦が来よりまっせ。ゾクゾクでっかい軍艦が来れば、食欲、飲み欲、性欲に心とからだをみなぎらせたフット・ボールの応援帰りの男たちがS……の市内にゾクゾク上陸して来ることにまちがいはなかった。

そういうゾクゾク来るでっかい軍艦は、昔旧帝国海軍の大軍港だった時代からのしきたりなのか、それとも彼らがすぐるロシア相手の戦争にさいして一夜にしてただの漁村から一大軍港に變貌したという帝国海軍の光榮ある大軍港をそっくりそのまま引き継いだときにやり始めたことな

のか、軍港に直接入る代りにハヤシさんの小山が見下す入江にイカリをおろすことになっていて、そこから男たちはランチで軍港中心の「USネイビー」と大書したアーチ型の門のある船着き場まで運ばれることになっていたのだが、そのアーチ型の門から街の中心に至るまでの街路のほどよきところにバッタ屋の店を開けば、街の商店街のおっさん、突然日本人用バーから外人専用バーの昔に自分の店を立ちかえらせたママさん、街角に立つ女性たちに彼らのふところから移動する金をごっそりいただける。彼らの好きなただでさえ喧ましい、わたしの耳にはまさしくただの騒音としか聞こえないタイプのロックをポリュームいっばいにひびかせてその下にテレコやらテレビやらを派手なはだか女のポスターといっしょに並べておけばそれだけで客引きに十分、あとはとにかくそのテレコをそこからひっさげて行こうが女の子のお土産と自らのマスターベーション用に花模様のパンティを買って行こうが、とにかくすべてはバカ安値だ、こんな安いのは、お兄ちゃん、コリーヤにもフィリップにもないで。

しかし、こういう店を出すのには、地の利を十分に心得たパートナーがあったほうが——すくなくとも当座さしあたってはあったほうが便利にきまっている。いろいろ調べてみるうちにわたしの探索の網にひっかかったのがハヤシさんで、ハヤシさんはバタ屋だが、このバタ屋、ある日、国道に面した店に入りきらない電気冷蔵庫やらテレビやらの「粗大ゴミ」を道路の横手に積み上げておいたら、コレ売ッテクレヘンカと下手な日本語で話しかけて来る男がいた。紺色の人民服

を着ていたので、あ、これはあのやらすぼったくりのおっさんの会社の工場に工賃がなにしろめ
っぱう安いのでこのごろひきもきらず修理に入って来る中国船の船員だとひと目で知れたが、五
千円でそのもとはまるっきりタダの電気冷蔵庫をゆずってやることにするとあとは来るわ来るわ、
まるでヘビの子があっちこっちでかえったように次から次へリヤカーまでひっぱって現われて、
あの毛さん、周さん、鄧さん、あれ、いったいどうしやるのかね。あの人らの国ではポルトもち
がうし、アンペアもちがうが、ま、そこは革命の偉業なした国、なんとかうまいこと動かすよう
にして持つて行ってヤミで売りよるんちがいますか。やらすぼったくりのおっさんというのは
かつては旧帝国海軍の工廠だったのを地元の資産家が引き受けてあとはおきまりの放漫経営、そ
のたたりで破産寸前になったところをそのやらすぼったくりの残酷ケチケチの商法で一代の名を
なした中小企業サイズの造船工場のおっさんを拝み倒して連れて来てめでたく事業はバンカイな
ったものの、つまるところ、おっさんのやることは簡単、情け容赦なく首切って人べらしをし、
給料カットで金を浮かせるというのだったから、あんなこと、ヨシノはん、あれ、あんだでもで
きまっせとハヤシさんは言ったが、あれ、わしでもできまっせとは、あいつ、決して言わなかつ
た。

こういう男がいて、そいつがもとで不要、タダより安いものはなしの商売で味を占めてやはり
これからのゾクゾクでつかい軍艦が来ることを見こしてか、どうやらバツタ屋まがいのことをや

りたがっているという話がわたしの耳に入ってきたのは、つい十日まえのことだが、いろいろ調べ考えたあげくにわたしが到達した結論は、下手にこういう地元のコネも深ければ顔もききなかなかの才覚の持ち主と知れる男と競争するより、こちらはなにしろバッタ屋のノウ・ハウも知っているし、原料の供給元もはるかに豊富に持っているという優位の位置を生かして、いっそ当座さしあたってのパートナアにしての協同経営、ひとつ、ギブ・エンド・テイクでやってみるか。どうですか、そういうことで、同郷、ということもありますやないかと、わたしは彼がわたしと同じ音に聞こえた金儲けの大会生生まれでS……には流れ流れて来た男であるというところの昔に調べ上げておいたことを口に出すと、ハッハッハッと大笑いして、そんならひとつやりますかな、ま、食べたあとは暑いよって冷たいもん、どうですかと協同事業、ギブ・エンド・テイクの固めの杯、それはコップになみなみとハヤシさんが注いでくれたコカコーラの焦茶色の液体であった。

話がきまると、こちらもち忙しい身だ、すぐ午前中のヒコキで立ち去ることにしてハヤシさんの二階の物干し竿にハヤシさんよりひとまわり下だという奥さんのものだともさっきそのコカコーラを持って来た前の奥さんとのあいだにできた、このあいだ出戻って来たばかりだという娘さんのものだとも見える色物のパンティとスリッパが旗のようにはためく二階家をタクシーを招んでもらって出ると、何思ったかハヤシさん、家のまえに来たタクシーを尻目にかけるようにその

まま小山の頂きからまっすぐに入江へ下る見はらしのよい砂利まじりの斜面へわたしを連れて行った。

どこへ行きますねんと当然の質問をわたしは口に出していたが、ハヤシさんは答える代りになり急傾斜の斜面に足を踏んばるようにして立ってアゴを入江の方向にしゃくってみせた。いつ入って来ていたのか、ミドリがかった紺色の水面のたたずまいを見せて静まりかえった入江のまんなかに、紺とネズミのあいの子の色の塗料を塗ったひと目でアメリカ合衆国のものだと思われる中ぐらいの大きさの見ばえのない軍艦が一隻ひっそりととまっていて、あれ、ズイハンカンですねんとハヤシさんは耳なれないことばを口に出した。ズイハンカン？　ズイハンカンで、何ですねんとわたしは訊ねたが、ハヤシさんは答える代りにポケットから紙きれとボールペンを出してなかなか達筆に「随伴艦」と漢字で三字書き記した。ま、お伴の艦ですな、これは。何んのお伴ですかと訊ね返すまえに、金づるのあんたの言いはこのからゾクゾク来るでっかい軍艦のお伴ですがな。お伴がスモウのツユ払いみたいに先に来よって、これ、さいさがよろしい。

どこから来よったんかと思いついた質問を口に出すと、わしの見るところ、これはチョーセンですなと同業者のことばを思わせる言い方をした。このごろ、こういうのもでっかいのもチョーセンのチヌヘ……と言いかけてチンカイとわたしの頭でも鎮海と漢字でまとまる地名を口に出して、ハヤシさんはその鎮海とことこのあいだを行ったり来たりしているのだとつづけた。今年の